ニーチェ解釈としての「記号の孤独」――ジョルジョ・デ・キリコと孤独の肯定

大西夏鈴（東北大学）

本発表では、画家ジョルジョ・デ・キリコ（1888-1978）が提示した「記号の孤独（La solitudine dei segni）」という概念が、フリードリヒ・ニーチェ（1844-1900）による孤独の肯定的解釈から着想を得ており、画家の生い立ちに起因する孤独を肯定的に転化する手段であったという仮説を提示する。デ・キリコは、1910 年から 1919 年にかけて制作した形而上絵画（L'arte metafisica）と呼ばれる作品群を説明する概念として「記号の孤独」を提示し、これについて 1919 年の論文「形而上絵画について」において、ある物が意味や文脈から切り離され、神秘的で未知の様相を帯びる状態と説明している。例えばこの時期に制作された《春のトリノ》（1914 年、個人蔵）は、物語性を排除したモチーフを非現実的な空間に並置し、「記号の孤独」を視覚化している。

これまで「記号の孤独」はニーチェ的ニヒリズムの表象と解釈され（Giulidori, Notina, *The Vision and the Enigma: Nietzsche's Aura in De Chirico's Art*, 2019）、その前提となる「神の死」は、デ・キリコが 17 歳で経験した父親の死と重ねられた（長尾、「父の幽霊―ジョルジョ・デ・キリコにおけるエディプス・コンプレックスについて―」、2020）。実際に、画家は父親の死を想起させる表現を作品に多用しており（Canova, *The Arrival of the Revenants: Giorgio de Chirico and Neometaphysical Art at the Frontiers of Time*, 2016）、この経験が「記号の孤独」の形成に影響した可能性は高い。

しかしこれらの研究は、「記号の孤独」が画家にとってどのような内的必然をもっていたのかを十分に論じておらず、父の死以外の個人的要因についても検討の余地がある。

本発表で注目するのは、画家が 1945 年に執筆した『回想録』における孤独への認識である。画家は自身の出自を「生まれた国と違う国籍をもつこと［…］に苦痛と屈辱をおぼえる」と述べており、父親の死の他に、生い立ちそのものに孤独を抱いていたことが示唆される。一方で、デ・キリコは自身の作品が、ニーチェの著作から受けた印象を表現した「孤独の奥深い叙情」をもつと述べている。すなわち、生い立ちの中で「苦痛と屈辱」として現れる孤独が、ニーチェ哲学と「記号の孤独」を介し、「奥深い叙情」として肯定的に捉え直されていることがわかる。

デ・キリコは 1910 年代の手稿において、ニーチェが孤独について論じた『ツァラトゥストラはかく語りき』（1883）を読んだことを明らかにしている。ニーチェはこの著作の中で「創造を携え、君の孤独の中へゆけ」をはじめとする記述によって、孤独を肯定的に捉える方法を提示している。孤独を埋めて解消するのではなく、孤独のなかへ入り込むことを促すニーチェの姿勢は、デ・キリコの「記号の孤独」の着想に強く影響したと考えることができる。以上の検討から、孤独の克服方法を模索していた 1910 年代のデ・キリコにとって、ニーチェが提示した孤独の捉え方が「記号の孤独」に強く影響を与え、自身の生い立ちを肯定し、作品制作を通じて孤独を昇華する手段となったことを明らかにする。